

# 反戦作家としてのヴィルヘルム・ラムスツス

小林万里子 ・ アンドレアス・ペーンケ\* ・ 木内 陽一\*\*

本稿では、19世紀末から20世紀初めのハンブルク学校改革運動において中心的な役割を果たした教師の一人として知られるヴィルヘルム・ラムスツスについて、民衆学校教師としての活動ではなく、生涯にわたって反戦文学を発表し続けた作家としての活動に焦点を当てて明らかにする。一定の期間や立場にとらわれずに改革教育運動家の思想と実践を描き出す作業を通して、それぞれの教師の教育観に加えて社会観や人間観が浮かび上がるとともに、簡明なスローガンに回収されえない改革教育運動の複層的な様相を読み解く鍵になることを示唆する。

Keywords : 改革教育運動, 反戦文学, ヴィルヘルム・ラムスツス

## 1. ハンブルク学校改革運動とラムスツス

ドイツ新教育（改革教育運動）の一潮流としてのハンブルク学校改革運動は、公立実験学校における多様な教育実践を特徴としていた。主導的な理念として「子どもから」を共有しながらも、一人ひとりの教師が自らの関心分野に特化して実験的な教育活動を展開したのである。本稿で取り上げるヴィルヘルム・ラムスツス（1881-1965）も、とりわけ作文教育の分野で名の知られた教師であった。

当時まだ独立した都市であったアルトナで1881年7月13日に生まれたラムスツスは、1902年にハンブルクの学校教師となった。ヴィルヘルム期には、友人であり同僚であるアドルフ・イェンゼン（1878-1965）<sup>1</sup>とともに『我々の教育作文——変装した低俗文筆家』（1910年）、『個々の文体への道』（1912年）、『窮地にある詩』（1913年）を著して、ドイツ語授業の改革に取り組む改革教育運動家として全国的に知られるようになった。ラムスツスらは、これまで学校で行われていた作文教育が子どもたち自身の体験に結び付いていないと批判した。彼らの主張は強烈なインパクトを与えるものだった<sup>2</sup>。改革教育運

動に参加した教師たちのみならず、著名な作家であるハウプトマン兄弟（カール・ハウプトマンとゲルハルト・ハウプトマン）やマン兄弟（ハインリヒ・マンとトマス・マン）も、彼らに賛同した。ヴァイマル期に入って公立実験学校が設立され始めると、ラムスツスはハンブルクのバルムベク労働者居住地区にある実験学校（1920年設立のティロー南校）の教師となった<sup>3</sup>。と同時に、ゲーラやブラウンシュヴァイクの実験学校の設立にも関わった。ブラウンシュヴァイク工科大学のドイツ語教育学教授に就任する話があったものの、1930年頃からナチ党が勢力を拡大したために実現しなかった。その後、ハンブルクのヤーレシュタットに新設された共同体学校であるメーアヴァイン校に異動したが、1933年に教職から追放された。

このようにラムスツスは改革教育運動に関わった一人の民衆学校教師として取り上げられ、評価されることが多い。だが、改革教育運動への関与やそこでの実績は、ラムスツスのプロフィールの一面でしかない。本稿では、1910年代より一貫して戦争に警告を発し続けた反戦作家としてのラムスツスに焦

岡山大学大学院教育学研究科 学校教育学系 700 - 8530 岡山市北区津島中3 - 1 - 1

\* グライフスヴァルト大学

\*\* 鳴門教育大学 772 - 8502 鳴門市鳴門町高島字中島748

Wilhelm Lamszus as an Antiwar Writer

Mariko KOBAYASHI, Andreas PEHNKE\* and Yoichi KIUCHI\*\*

Division of School Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

\*University of Greifswald, Domstraße 11, 17489 Greifswald, Germany

\*\*Naruto University of Education, 748 Nakashima, Takashima, Naruto-cho, Naruto 772-8502

点を当てて、彼をとりまく時代状況の中に位置づけしていくこととする。それにより、改革教育運動の枠だけでは捉えきれない教育者の思想と実践を浮かび上がらせたい。

## 2. 反戦作家としてのラムスツスの活動

### (1) 第一次世界大戦への警告

ヴィルヘルム・ラムスツスが1912年に著した『人間屠殺場——近づきつつある戦争の姿』はドイツ文学史上、1870-71年の普仏戦争以降の科学技術の発展を基盤としながら将来の戦争を描出した唯一の試みである。ラムスツス自身は100ページ程度の青少年向けの読み物として執筆したにすぎなかったのだが、この著作は世界中で反響を呼んだ。

ラムスツスのアイデアは予備役訓練から生み出されたものだった。「第一次世界大戦以前を体験していない人は、当時のドイツ市民がどのような祖国愛を感じていたか、想像できないだろう。ドイツ人が戦争について語るときは、どこまでも進撃し歓喜の叫びをあげる兵隊たち、たなびく旗、軍歌や凱旋歌などを思い浮かべていた。1870-71年の普仏戦争に際して、人々は華々しい凱進行進を見た。だが、それ以来、戦争の様相がどのように変わったかについて、人々はまったく意識しなかった。——私はロックシュテットの野営地で予備役訓練に行ったが、非番の午後に実弾砲撃の様子を見た。(中略) 砲撃の後には激しく打たれた射撃の的があった。標的の頭、身体、手足のすべてに榴散弾が命中しており、打ち抜かれていない的は一つもなかった。私はその正確さに感嘆する一方で、この(木や布でない)標的になることに恐怖を感じた。——人間はなんと驚くべき科学技術を造り出すことか。武器は卓越した芸術的な域に達していた。1分間に240発以上！驚異的な技術が発揮された機関銃！音を立てながら雨よりも激しく弾丸を降らせる。死神が大鎌を持たなくなり、機械操作だけをするかのようだ。穀物はもはや手で刈り取るものではない。小規模な手作業から大規模な工場へと変わっていく。これが、私が見た状況だ。私たちは生まれてから死ぬまで技術者や工具に操作される。大工場でボタンやピンが生産されるのと同じように、機械的に殺されるのだ」<sup>4</sup>。

普仏戦争後40年間の平和な時代を通して、ドイツでは戦争に対するイメージはほとんど変わらなかった。プロイセンの兵士たちの報告にも旧来の戦争とは異なる総力戦の要素が含まれていたし、クリミア戦争やアメリカ南北戦争、ボア戦争、日露戦争などによって戦争の姿の変化が証明された。にもかかわらず、戦いの叙述に関しては、ナポレオン戦

争当時のままのものが圧倒的に多かった。つまり、特殊な才能を持つヒーローが戦況を左右するというのである。戦争は一定の法則の下で行われ、仲間意識に支えられながら勝敗が決するものであり、戦争技術の優劣には関わりない、と。無敵の栄光に支えられた戦争像を基盤としながら、ドイツのインテリたちの多くは、帝国後期の硬直したプロイセン社会を突破する可能性を有するものとして、新たな戦闘を歓迎した。未来の戦争は、一人ひとりの参戦者が新しいアヴァンギャルドな社会の先駆者として際立つ可能性を感じさせた。戦争は戦場に限定されると信じられていた。同時に人々は戦争を、新しい秩序を構築し、文化体系を修復するために不可欠な手段として称賛した<sup>5</sup>。

「未来の戦争」をめぐる議論がずいぶん前から国際的に広まっていた状況を考えると、こうしたドイツの状況は不可解とも言える。世界的な議論の主導的な役割を果たしていたのは、ポーランドとロシアの銀行家であり工場主であり鉄道開拓者でもあったイヴァン・ブロッホ(1836-1902)の記念碑的な全6巻の著作『未来の戦争——技術的・経済的・政治的關係のなかで』(1898年)である。この著作においてブロッホは、近代的な軍事作戦の破壊的な影響を見越していた。サンクト・ペテルブルクで刊行された『未来の戦争』は、翌年にはドイツ語、フランス語、英語に訳された。さらにロシア皇帝ニコライ2世に、1899年と1907年のハーグでの万国平和会議の開催を決断させるものだった。けれども、この会議においては、とりわけドイツの反対により、政治的手段としての戦争を排除することもなく、軍備増大の抑制に向けて合意することもなかった。陸戦協定が採択されて、国際仲裁裁判所の創設が決まっただけだった。「未来の戦争」に関する議論の第二のマイルストーンとして挙げられるのが、フランスの生理学者シャルル・ロベール・リシェ(1850-1935)が著した『戦争の過去と平和の未来』(1909年)である。リシェは1913年にノーベル生理学・医学賞を受賞した人物であり、現代の大規模な戦争の経済面・財政面での不合理性を示そうとした。彼によれば「かつての戦争でも血が流れたが、未来の戦争に比べれば、子どもの遊びのようなものである。兵器と軍の驚異的な発展が、幸運にも、未知の巨大な権力手段を用いようとする勇気を削ぐという進歩をもたらした。37年にわたってヨーロッパで大規模な戦争が阻止されているのは、政府や民族の英知によるのではなく、むしろ(当然のことながら)新しい軍備の見通しがたい結果への怖れによる」<sup>6</sup>。さらに「未来の戦争」に関わる国際的なアピールとして

は、ラルフ・ノーマン・エンジェル（1872-1967）のベストセラー『大いなる幻影』（1910年）が挙げられる。この著作は刊行後1年のうちに15ヶ国語に訳された。この著作でエンジェルは戦争そのものを非難するだけでなく、経済的な観点からも戦争の価値を認めなかった。エンジェルの著作は新しい平和組織の設立を促して、1914年までにイギリスでは40のクラブがこの運動に関わった。

ラムスツスは「未来の戦争」に関わるこれらの著名な同時代人たちの議論について知っただけでなく、積極的に関わった。例えば「ヨーロッパの戦争の標徴」（1913年）においてプロッホの著作を取り上げて「これまであまり顧慮されておらず、ましてや精査されることもなかった歴史心理学（的な側面）」を指摘した<sup>7</sup>。ラムスツスによれば「歴史心理学的な側面は人々から回避されてきたように見える。イヴァン・プロッホだけが、将来の戦争に関する卓越した理論において、現代ヨーロッパの兵士たちの心理に少しだけ言及した。ここに——過去の戦争の歴史から繰り返し導き出せるとおり——問題の核心がある。大砲の個数や人数、兵器の構造の新旧ではなく、兵器を扱う精神が重要なのだ。ドイツ解放戦争やフランス革命軍に見られたことが、今、世界史上、またバルカン半島で起こっている」。——カール・フォン・オシエツキー（1889-1938）が1919年に『精神病院』というタイトルで刊行された『人間屠殺場』の続編に寄せた序文で述べているように、「『人間屠殺場』は戦争の潜在的な危機の時代に構想されたものである。永続的な国際間の緊張と危機の原因に対する深い理解に基づいて、新たな平和主義の主張が生まれた。それは初めての試みだった。だが、ラムスツス自身は煽動者になろうとしたわけではない。例えばノーマン・エンジェルが長大な数列を示しながら世界規模での戦争が途方もない悪事であることを指摘したのとは逆に、ラムスツスはそうしたことにはあまり言及しなかった。ラムスツスは煽動者としてではなく芸術家として物事を見ていた。煽動者の思考はスローガンやプログラムへと強化されていくものだ。だが、芸術家の場合、人間の感情と思考の内面を描き出す。そしてその様々な像が、内面深くに表れた同情に滲んだ像が『人間屠殺場』であり『精神病院』である」<sup>8</sup>。

1912年以降には戦争が「万物の父」と喧伝され<sup>9</sup>、学校の教育内容全般が軍国主義的になっていくなかで<sup>10</sup>、ラムスツスは平和を志向する青年教育のための効果的な方途を探った。彼は自らの経験を活かして<sup>11</sup>、芸術的な手段によって戦争の悲惨さを示そうとした。戦争をしないよう警告するとともに戦争へ

の嫌悪感を惹き起こそうとした著者ラムスツスの意図は、すでに「人間屠殺場」というタイトルにも表れている。だが、ギリシアの悲劇作家アイスキュロスに倣った語の組み合わせは、精神的にも物質的にも戦争準備が進む状況下で、一義的に捉えられてしまった。ラムスツスが描いたジェノサイド像の特徴は、省略を多用した簡潔な記述の仕方にある。余計な記述を省き、本質的なものに限定して記したことで、並べられた名詞の一つひとつから受ける印象が強い。諸事象に常に含まれる主要な事項は体験の直接性によって強化され、また確かな言明によって限定づけられる。恐怖と自己像の混乱が読者にもストレートに伝わるとともに、戦争の無意味さを理解できるようになっている。

ラムスツスが数日間で書き上げた『人間屠殺場』は、宿敵フランスと熱狂的に戦った若い父親の運命を描いたものである。行進曲に乗って見送られた彼らが前線に送られる前に教会で兵器を奉納した様子が次のように描かれる。「私たちの銃は、逸れることのないものとして祝福され、弾丸は空中で失われることなく何百人もの人間に命中して、その身体を引き裂くものとして祝福された」<sup>12</sup>。前線でこの——ラムスツスが名づけもしないままにしている——主人公は、「血と鉄」（S.57-65）の長い行軍の後、初めて死に直面した。「冷たいものを押し込まれたように、気持ちが怯えた」（S.52）。だが、まだそれほど陰気で詩的ではない。近代的な戦争は詩を理解せず、破壊しか知らない。機関銃や地雷などの新しい兵器の投入は、おびただしい数の死傷者を生み出すことになった。「私たちはびくびくしながら土塁の向こうを眺めた。灼熱の地獄が現れたか？ 前進していくと、不自然な音が聞こえてきて、私たちは身を寄せ合った。……ふるえながら見ると、軍服が赤い染みで濡れていた。筋肉繊維が衣服に張りついてたのだ」（S.75）。兵士は黒ずんだ砂の上に「何か白いもの」を見つけた。それは「誰かの手……軍服に張りついた肉片……それが何であるかが分かり、恐怖に襲われた。他にも腕、脚、頭、胴などが散乱していた。……連隊の全員がその場でずたずたになって倒れていた。酷い有様だった」（S.75）。最後に主人公は、彼が赴いた前線で唯一の生存者となるが、ピストル自殺して共同墓地に埋葬される。最終章「私たちの無残な死」（S.82-84）で筆者は新しい領地の征服という戦争の大義名分に触れて、皮肉な真実に突き当たる。「眼前にあるものを得ることで、私たちは解放され、満たされる。私たちは他者の口からパンを奪っている」（S.84）。

ラムスツスが描写したのは、一人ひとりの兵士の

英雄的豪胆や、ヴァルター・フレックス (1887-1917)、マンフレート・フォン・リヒトホーフェン (1892-1918)、エルンスト・ユンガー (1895-1998) などに寄せられた旧来の戦争像に裏づけられたヒロイズムへの期待でもなく、また、巨大な破壊力を持った強力な殺人装置の匿名性でもなく、硬直した前線と地雷原に代表される塹壕戦だった。個人は最終的に戦場でただの客体でしかなくなる。それは、英雄的行為や祖国のために自らの生を投げ出すといったこれまでの標準的なイメージが、新しい兵器技術の出現により時代遅れになったことを示している<sup>13</sup>。確かに未来の戦争に対する恐怖を呼び覚ました作家は、ラムスツス以前にもいた。だが、第一次世界大戦が始まる1914年以前に、戦争への恐怖を描いた作家は他にいなかった。加えて、兵士の行為の意味をここまでラディカルに疑った者もいなかった。未来の戦場で起こることを、軍を導く側ではなく導かれる側（平凡な兵士と彼の犠牲）から徹底して考察した者は、ラムスツスだけだった。

第一次世界大戦の体験を綴った著作のなかでも、アンリ・バルビュス (1873-1935) の『砲火』(1916年)、アルノルト・ツヴァイク (1887-1968) の『グリーシャ軍曹をめぐる争い』(1927年)、エーリヒ・マリア・レマルク (1898-1970) の『西部戦線異状なし』(1929年)、アーネスト・ヘミングウェイ (1899-1961) の『異国にて』(1929年)、ガブリエル・シュヴァリエ (1895-1969) の『勇士の恐怖』(1930年) などは強烈な印象を与えた。だが、とりわけラムスツスの小説には、大惨事を回避し戦争を阻止したいという希望が込められていた。自身の著作の主眼としてラムスツスが最初に挙げるのが、希望だった。アルフレート・ヤンセン社 (ハンブルク/ベルリン) から出版された『人間屠殺場』は大きな反響を呼んだ。数ヶ月のうちに70版を重ね、3ヶ月後には10万冊を売り上げた。また、1913年にイエナで開かれた社会民主党党大会に向けて、廉価な「民衆版」が2万冊も準備された。同じく1913年には英訳されてロンドンやニューヨークで出版された。加えて、フランス語、ハンガリー語、ロシア語などにも翻訳された<sup>14</sup>。フランス語版にはアンリ・バルビュスが、デンマーク語版にはマルティン・アンデルセン・ネクセ (1869-1954) が序文を記しており、ドイツ語版にはカール・フォン・オシエツキーが先述の序文を寄せた。社会民主党の出版物や機関誌『新時代』(1912年9月20日付の第55号) で評されるとともに、国際平和組織の会議でも『人間屠殺場』に対する評判は高まった。社会民主党系の『ハンブルク・エコー』は、この小説をすでに1912年9月1日

号から8回連載で1面に (他紙のように別冊としてではなく) 掲載した<sup>15</sup>。例えばドイツ平和協会の創設者であり1911年にノーベル平和賞を受けたアルフレート・ヘルマン・フリート (1864-1921) は、次のように指摘している。「ラムスツスは私たちに『これから』の戦争について物語った。彼が示したものは、近代的な戦争装置が生身の人間に向けられたときに何が起こるか、であった。兵士はヒーローでない。殺人機械に押しつぶされ、ずたずたにされ、爆破されるだけの素材となる。・・・いや、著者は誇張して述べているのではない。戦争はもはや太古からの叙事詩で描かれたものとは異なる。戦争は大量殺人であり、大量浪費であり、残虐さにおいて自然を凌駕する。これを著者は『人間屠殺場』と呼んだ。私はこの著作が何万人もの人の手に取られることを願う。これは人間性を描いた神聖な著作の一つである。すべての母親が読むべきだ。一方、老いも若きも男性は、この著作を通して今日の戦争をめぐる状況、すなわち戦争と戦争に向けての準備がいまだに政治の中心に位置づけられる状況をどう判断すればよいかを理解できるだろう」<sup>16</sup>。1915年9月に、ドイツで初めて毒ガスが用いられた後にも、フリートはラムスツスの著作を想起した。「数年前に、信じられないほどぞっとするような未来の戦いが描かれ、害虫駆除方法についても見越されていた。『大量に、冷酷に、精通したやり方で絶滅させられるのは、害虫だけだ。この戦争で、私たちは害虫以外の何物でもなかった。』——この著者が描いた恐ろしい夢は現実になった」<sup>17</sup>。——フリートに限らず多数の前線の兵士たちが、実際に体験した戦争の恐怖感から、すでにラムスツスが描いていた工業化された次代の戦争の姿を立証し、さらには控えめながら描写するようになった。例えば、タンネンベルクの戦い (1914年) について書かれた軍事郵便の手紙からの引用をもとに、アルフレート・ファウスト (1883-1961) が1914年9月1日に次のように記している。「戦いについて語れと言うのか。そこには何も目的はない。名前だけは違うが、誰もが同じような姿をしている。弾丸の音、大砲の爆音、負傷者の叫び声、重傷の死体など。——『人間屠殺場』を思い出すがいい。あの著作に描かれていることは事実だ」<sup>18</sup>。きわめて正当な評価として、『人間屠殺場』の著者に宛てられた1912年のジュネーブ国際平和会議からのメッセージが挙げられる。そこでは『人間屠殺場』が「傑出した描写によって、稀有な芸術的個性を発揮し、未来の大量虐殺について心を打つ作用」を及ぼすものであり、「平和主義者たちにとって多大な意味のある論拠を示しており、平和主義文

学のなかでもとりわけ価値高い」と称えられた<sup>19</sup>。

一方、反発も大きかった。「皇帝閣下、国王陛下、ドイツ帝国皇太子」は直接ハンブルク市政府に働きかけて、ラムスツスを即座に停職処分とした<sup>20</sup>。自由ハンザ都市ではそれどころか著作の販売も禁じられた。保守派の報道陣はラムスツスを「非国民」「神経質な臆病者」などと弾劾した。とりわけ極端だったのが『ハンブルク通信』で、「公安を害する青年教育者」と評した<sup>21</sup>。批評家ケンペンドルフは文学・芸術を扱う月刊誌『クセーニエン』で「ラムスツスはすばらしい文筆家であり、この名前を記憶に留めておく価値がある。けれども、この作品の全体的な印象は良くない。ひどい誇張と非現実性に満ちており、戦争の暗黒面しか描写されていないために、一面的な偏向作品だという非難を受けるしかない」<sup>22</sup>と断言した。

ラムスツスが自著と彼自身に関わる論争について言明するために活用したのは、『教育改革』（1912年12月号）と『平和の番人』（1913年2月号）だった。例えば彼の未来の戦争のとらえ方が暗すぎるという批判に対しては、「私は多くのことを強烈に描きすぎたかもしれない。真の姿は日露戦争の記録から明らかになるだろうし、旅順攻囲戦を想起すればよい。この戦いでは塹壕に挟まれて1万人の若者が無意味に虐殺された。羊の群れのように。隠れた場所にある虐殺機械に逆らうこともできずに。・・・私の記述は経験に基づいたものであるし、数字的にも議論の余地がない」と応えている。

動揺と抗議デモを懸念して、最終的にラムスツスは「名誉ある委託」を受けてアフリカに旅立った。アフリカではフランス外人部隊に属するドイツ人について研究することとされた。彼の反戦的な姿勢に対する国外での評判は好意的であり、市政府はラムスツスを慎重に教職から遠ざけ、ドイツから追放したのだ。ラムスツスはこれを受け入れた。だが、イタリアを横断してチュニジアに向かう数週間のうちに、最終目的地であるシディ・ベル・アッベス（アルジェリア北西部にある外人部隊の軍都）までの資金が尽きてしまった。ラムスツスに残されたのは——『戦争の諸相』の執筆時と同様に——もっぱら想像を手がかりに、彼自身は見たこともない外人部隊について記述することだけだった。そこで彼は、数多く出版されている外人部隊に関する体験報告を参照した。これらの体験報告は、青年を外人部隊に誘うべく、偽りのロマンチズムに満ちたものだった。体験報告に記された青年たちの冒険心を、ラムスツスは手に汗握る作品『失われた息子』に著し、1914年にハンブルクで刊行した。ラムスツスは外

人部隊に対する批判——この批判はその多様性においてドイツ語圏ならびにフランス語圏の外人部隊を扱った作品のなかでも無比のものだった——に基づいて極めて辛辣に、軍事帝国主義体制を批判した<sup>23</sup>。

1914年8月に召集令状を受け取ったラムスツスは「この戦争の言葉にできないほどの恐怖を前もって知っていたから、私は戦争が始まるとは信じたくなかった」<sup>24</sup>と述べた。この時点で『人間屠殺場』の続編は『精神病院——戦争の諸相』という題名ですでに校了していた。だがこの著作は戦後になってようやく検閲条件付きで（ハンブルクで1919年に）出版された。数多くの人々の個人的な戦争体験で構成された『精神病院』も大きな反響を呼んだ。戦時中には総司令部が常に『人間屠殺場』の著者をできる限り早く最前線に赴かせようとした。が、健康上の理由からラムスツスは、1915年夏から1916年初頭までレンツブルクの補充兵大隊に所属しただけだった。詩を詠むことで、ラムスツスは戦時中にも戦争に対する絶望感を表現した。これらの詩は同志志を持った友人を介して広まった。戦争が終わると彼は反戦詩をまとめて『屍の山——戦時中の詩』とタイトルをつけ、1921年にライプチヒで刊行した。ラムスツスが予見した物量戦が第一次世界大戦で残酷な現実になった時に初めて、多くの人々が『人間屠殺場』に示された意識状態に達し、ヒロイズムが試される場としての戦争観を修正した。

## （2）第二次世界大戦への警告

1918年以降もラムスツスは戦争の危機を感じていた。そのため絶えず戦争に抗する文章を書き続けた。彼が編者の一人となった著作集『兵器を呪う言葉』（1923年）は、すでにそのタイトルに首尾一貫したアンガージュマンを看取できる。たしかに当時、国際的にも「戦争を繰り返さない」運動が展開されており、イギリス、オランダ、ドイツ、スカンジナビア諸国ではこれに賛同する人が10万人に達した。けれども、この平和主義者たちは実際どれだけの力を持っていたか。ドイツ国内に関していえば、およそ7万人が平和主義組織に属していた。1914年には1万人程度だったことに比べると増加したが、国家主義的な組織（シュタールヘルムなど）に属していた数百万人に比べればごくわずかでしかない。また、例えば全世界で読まれたレマルクのように、恐ろしい幻想によって戦争を物語る著作が500点ほどあった。その一方で、ヴェルナー・ボイメルブルクやエルンスト・ユンガーの小説のように、多かれ少なかれ戦争をヒロイズム的に美化した何千もの著作が

あったのである<sup>25</sup>。

戦争に対する姿勢は、ラムスツスの政治的志向の基盤でもあった。帝国期には教育（学）者が社会民主黨員になることは禁じられたため、彼は教職に就いた1902年に「社会科学協会」に入会した。これはドイツ初の社会民主主義教員組合である。社会民主党が1912年に戦争債権を認めた後にはカール・リープクネヒト（1871-1919）を支持した。リープクネヒトは1914年12月2日にドイツ帝国議会においてただ一人、軍事費の増大に反対した議員だった。その後、ラムスツスは1918/19年に設立されたドイツ共産党に入党した。当初、ラムスツスは共産党の文化活動に積極的だった。彼がアドルフ・イェンゼンやアンリ・バルブッセとともに、舞踏家マリー・ヴィグマン（1886-1973）を招いてハンブルク労働組合会館で企画した催し物は盛況だった。バルブッセらが『砲火』を朗読した後、ラムスツスは彼の詩の一つを披露した。「この詩は二つの民族を鉱山労働者にととえて語ったもので、両側から岩石を砕いて中間地点で出会うまでトンネルを掘っていくという話だった。私が朗読を終えると、バルブッセが立ち上がって私を抱きしめ、ホール中に観客の称賛の拍手が鳴り響いた。かつて生死を賭けて戦った二つの民族の親交を示す、象徴的なパフォーマンスだった」<sup>26</sup>。だが、ラムスツスがハインリヒ・フォゲラー（1872-1942）とともに、4日間にわたる講演会を開こうとすると、党幹部に呼ばれた。官僚的な幹部に言わせるとフォゲラーは「知的に無定見な者」であり、ラムスツスによる公開フォーラムの開催は禁じられた。共産党におけるラムスツスの文化活動を終わらせたこの鍵となる出来事について、彼自身が自伝で簡単に触れている。「私に課せられたのは、将来的に黨員になる人だけを招くことだった。このことが、私の共産党内での文化活動をあきらめさせた。そしてその直後に共産党からも離党した。私は政治の領域においても従順なイエスマンになれなかった」<sup>27</sup>。より正当で人間的な世界というラムスツスの理想は崩れていった<sup>28</sup>。次いでラムスツスは世界市民を志向した。積極的な平和教育や民主的な平和政策に基づくアンガージュマンが必要と考えたラムスツスは、実験学校教師としての活動や「自由プロレタリア青年」での活動に注力し、世界新教育連盟にも加入した。例えば1923年にはホーエンマイスナーでの自由ドイツ青年の第2回会議で講演した。1925年にはハイデルベルクでの世界新教育連盟第3回国際会議で講演を行い、英米圏のダルトンプランをドイツに広めた先駆者とみなされた<sup>29</sup>。

その頃、ドイツ軍は内密に新しい巨大艦隊や戦車

隊を整えていたが、国内ではアドルフ・ヒトラーらによる戦争への煽動に対する批判もあった。「神々のための演劇だ」とラムスツスはすでに1922年に『人間屠殺場』の新版のまえがきに記している。「4年以上にわたって血の沼に首まで浸かって大惨事を重ねた民族が、今また再び堂々と指導者として頂点に立とうとしていることを、神々に示そうとしている。皆が一緒になって、一時的に消滅した争いを始めようとしている。すでに一度、民衆を人間屠殺場に追いやった者が、民衆を解放した！あなた方は彼らに委ねている！彼らがあなた方に示した道筋は、どこから来たかにかかわらず、今また私たちを待ちかまえている人間屠殺場に導くものだ！」

1915年4月22日に帝国軍が初めて化学兵器を用いたイーペルでの恐ろしい事件から10年目の記念日に寄せて、ラムスツスは戯曲『毒ガス』を書いた。これはハンブルクのコンヴェントガルテン音楽堂で1925年に上演されて、大きな成果をおさめた。改めて彼の預言者としての資質を明らかにするものでもあった。というのも、3年後の1928年5月20日にハンブルク港近くのシュトルツェンベルク社の敷地でホスゲンガスのタンクが爆発して12人が死亡し、200人以上が負傷した。同時に明らかになったのは、ドイツでは民衆の権利を阻害する毒ガスが製造されているという恐怖だった。ラムスツスは『人間屠殺場』72版に新たに寄せたまえがきにも「民衆の眼前に繰り広げられた軍縮劇場は、実質的に言えば、古くなった方法をやめて、役に立たなくなった兵器を歴史博物館に格納することだった。平和会議や国際連盟の背後で、どの国においても新しい戦争のための組織が作られて、航空機や毒ガス弾や焼夷弾が大量に生産されている。科学者たちは細菌を培養し、毒ガスをペストやコレラと同じように作用させようとする」と書いた。カール・フォン・オシエツキーもこの毒ガス事故を取り上げて、早速、軍国主義や戦争に反対した<sup>30</sup>。

平和は次第に危うくなっていた。ラムスツスの新著は、1930年代初めにはもはや出版されもしなかった。ヒトラーの権力掌握より前に、彼は直接、原稿の写しをカール・フォン・オシエツキーに送って、何章かを『世界ステージ』紙上に載せてほしいと提案したが遅かった。オシエツキーは1933年2月28日に逮捕され、強制収容所に送還された。ラムスツスは草稿や資料、記録など危険な書物をすべてハンブルクのクライン・ボルシュテルにある自宅に隠して、彼の家族と彼自身を守ろうとした<sup>31</sup>。

ラムスツスの不安やおそれは現実になっていった。ドイツにあった200校以上の公立実験学校に関

しても同様である。すでに1924年に彼はイタリアのファシズムを見て次のように推測した。「私たちの運命が歴史の力に決定づけられることは確かだ。近い将来、ムッソリーニが国政の舵を握ることになれば、彼はまず私たちの新しい学校を潰すだろう。教育の再生を口実にして、彼は私たちの学校を反動派の非難に晒すだろう」<sup>32</sup>。

1933年に新しい独裁者はラムスツスを教職から追放するとともに、執筆や作品の上演を禁じた。ラムスツスの作品は図書館から押収され、著作タイトルは1933年5月1日に公開された焚書リストに挙げられた。3人のまだ幼い子どもたちの父親であるラムスツスにできたことは、フーゴー・ジーカー(1903-1979)らに助けられながら<sup>33</sup>、『ハンブルク新聞』の文芸部でひそかに働いて経済状況を保つことだけだった。ラムスツスは1935年8月初めにロベルト・ヴェールというペンネームで、魔女裁判の告発者フリードリヒ・フォン・シュペー(1591-1635)の没後300年を機に、シュペーを評価する論評を著した。この時ラムスツスにとって特に重要だったのは、彼が描いた中世の恐怖からナチズムの残虐行為が透けて見えるようにすることだった<sup>34</sup>。

### (3) 第三・四次世界大戦、核の地獄への警告

ナチス政権から解放されて、ラムスツスは再びドイツ平和協会に参加した。広島と長崎の原爆投下の印象をもとに、彼は1946年に「研究者と死」と題する散文で核戦争を取り上げた<sup>35</sup>。この散文はアンソロジー『死の大舞踏——物語と詩』に収められて1946年にハンブルク文化出版社から刊行された。ここでラムスツスが描いたのは、科学技術革命という状況下での社会に対する科学者の責任であり、核による惨事に警告を発した。ベルトルト・ブレヒト(1898-1956)も、ガリレイの自己非難や自己分析の鋭さをより強調して『ガリレイの生涯』(1938/39-1955/56)を書き換えた。フリードリヒ・デュレンマット(1921-1990)の『物理学者たち』(1962年)やハイナー・キップハルト(1922-1982)の『オッペンハイマー事件』(1964年)もこの問題を扱い、戦後世代の平和主義者たちに読まれた。

ラムスツスの「研究者と死」の主人公は一人の科学者である。彼は自らの研究成果が人類に対して、言葉にならないほどの被害を与えかねないのはいか、あるいはその利用に人類が向かうのではないか、という不安を抱いている。どちらの可能性も、世界を破滅させるという研究者の見通しと、もっぱら平和的に科学的研究成果を利用するという研究者の夢から導き出されたものである。作品の中では、

財閥の長が諸科学の発展を支える企業の役割を体現しているのだが、その穏やかな仮面が剥がされ、研究者にはグロテスクに歪んだ髑髏に見えていく。こうしてラムスツスは——ブレヒトとは違う方法で、デュレンマットに似たかたちで——科学の誤使用における企業の役割を暴き出した。科学がもっぱら平和的に利用されたとしても、1986年4月26日のチェルノブイリ原発事故を経験した後は、核エネルギーの平和的利用にも危険が伴うことが分かったのである。——ブレヒトが描いたガリレイは、政治的な圧力に屈して、自身の研究の生産的で人道的な利用可能性を封じた。ラムスツスが描いた科学者は身を引いて、自分自身と自身の発見を誤使用から守った。デュレンマットの『物理学者たち』に描かれた科学者メビウスも彼の研究成果を燃やしたけれども、一度発見されたものははや撤回できないという認識が示されている。

同じく1946年に、まだ分割されていない時期の民主的なベルリン市当局は、占領国4ヶ国の合意のもとで、ラムスツスを教育大学長に任命した。だが、65歳になっていたラムスツスは、そうした課題に取り組むには健康面での不安を感じるとして、これを断った。一方、ラムスツスは、東西の学校改革に関わる著作を出版することで、民主主義教育について東西ドイツで教育(学)的対話を起こそうとし、1952年にヴェストファーレンで開かれたシュヴェルマー・クライゼのフォーラムにも参加した。シュヴェルマー・クライゼは東西ドイツの教員組合で、ドイツ分断に抵抗していた<sup>36</sup>。また、かつて1926年から1933年に妻ルツィアとともに発足させた生徒たちとのラジオ放送活動を復活させて、メディア教育における先駆的な役割を果たした。1960年には東ベルリンのフンボルト大学教育学部から名誉博士号を授与された。

81歳になったラムスツスは「晩年を迎えて、第三次世界大戦は起こらないと確信する。世界の何百万人ものが、差し迫った危険に果敢に立ち向かわなければならないと感じている。平和の戦士たちが日に日に力を増していき、新たな世界戦争を誘発したりこの世を再び屠殺場——このたびは誰も逃れることができないだろう——に変えたりするような事態を回避している」<sup>37</sup>と述べた。だが、1962年10月以降のキューバ危機を契機として、ラムスツスは晩年にあたる1964年半ばに新作『大統領が核のボタンを押そうとした』<sup>38</sup>を著した。ラムスツスの死のわずか1ヶ月後にアメリカのジョンソン大統領は大規模なベトナム爆撃を命じており、ここでもラムスツスの預言者としての資質が看取された。

冷戦下では、ラムスツスのように一貫して平和政治と平和教育にこだわる人物は、次第に忘れられていった。最期まで平和のアンガージュマンと教育の発展に尽力したヴィルヘルム・ラムスツスは、ハンブルクで1965年1月18日に83年の生涯を閉じた。

### 3. まとめに代えて

旧来の教育史研究において、改革教育運動は、1930年代のナチズムの台頭によって弾圧され衰退したとみなされることが多かった。この解釈は改革教育運動の「自由」で「進歩」的なイメージを際立たせる役割を果たしてきたとも言えよう。だが、1980年代以降には、改革教育運動とナチズムとの連続性／非連続性が問われたり、例えばアドルフ・ライヒヴァイン（1898-1944）のようにナチに抵抗した教育者に光が当てられたりしている。一人ひとりの教育者が、ヴァイマル期からナチズム期、戦後という時代の変化のなかで、それぞれの社会的、政治的、地域的な状況にどのように対峙してきたかについて、個別のかつ客観的な検証が進みつつある<sup>39</sup>。

本稿もこのような研究動向に連なるものである。自由作文を提唱した民衆学校教師というラムスツスのプロフィールは括弧に入れて、近代的な戦争への批判を展開し続けた作家としてのプロフィールを描出した。この作業を通して見えてきたのは、反戦文学はラムスツスの人間観や社会観を発信するためのものだったことである。こうした反戦作家としてのラムスツスの姿を考慮に入れたうえで、改めてハンブルク学校改革運動におけるラムスツスの活動を意味づけることも有効ではないだろうか。おそらく学校改革にも反戦文学にも通底するラムスツスの教育観や社会観が浮かび上がるだろう。改革教育運動という一時期の状況や学校教師としての立場に限定せずに個々の教育者の活動を丁寧に描き出す作業が、改革教育運動の複層的な様相を読み解く鍵になると期待できるのである。

### 引用・参考文献

畔上泰治（2007）「創り上げられた敵のイメージを剥ぐ——W.ラムスツス『人間屠殺場』に描かれた反戦思想」, 沖縄外国文学会『Southern Review』No.22所収。

Böhm, W. (2002). Der Krieg als Erzieher. Die Verherrlichung des Krieges durch die Pädagogik. In: Böhm, W. & M. Lindauer (Hg.), Welt ohne Krieg (S. 23-46). [Elfte Symposium der Universität Würzburg], Stuttgart & Düsseldorf & Leipzig.

Christadler, M. (1994). Schreckensbild und Vorbild. Die Fremdenlegion in der deutschen Literatur und Propaganda vor 1914. In: H. Abret & M. Grunewald (Hg.), Frankreich aus deutscher Sicht 1871-1914 (S. 63-77). Frankfurt am Main & Bern.

Clark, C. (2013). Die Schlafwandler. Wie Europa in den Ersten Weltkrieg zog. München (3. Aufl.; 1. Aufl. 2012).

Dudek, P. (1993). Gesamtdeutsche Pädagogik im Schwelmer Kreis. Geschichte und politisch-pädagogische Programmatik 1952-1974). Weinheim & München.

Fluch den Waffen (1923). Fotos, Gedichte, Reden und Aufsätze von Danton (d.i. Bodanski) & E. Friedrich & W. Lamszus & L. Tolstoi. In: Die schwarzen Hefte, Bd. 2.

Fried, A.H. (1912). Das Menschenschlachthaus. In: Die Friedens-Warte, Jg. 14 (Augustausgabe), S. 281-283.

Fried, A.H. (1915/2005). Mein Kriegstagebuch – 7. August 1914 bis 30. Juni 1919. Hg. und eingeleitet von G. & D. Riesenberger. Bremen.

Gleim, B. & Richter, D. (1980). Das Menschenschlachthaus und seine Leser. Ein Stück Wirkungsgeschichte aus den Akten der Polizei. In: Wilhelm Lamszus, Das Menschenschlachthaus. Bilder vom kommenden Krieg (1912), neu herausgegeben von J. Merkel & D. Richter (S. 131-152). München.

Karuscheit, H., Wegner, J. & Wernecke, K. (2014). Macht und Krieg. Hegemoniekonstellationen und Erster Weltkrieg. Hamburg.

Kempendorff, P. (1913). Rezension. In: XENIEN. Eine Monatsschrift für Literatur und Kunst, Jg. 6 (Januarheft), S. 60-61.

木内陽一／アンドレアス・ペーンケ／小林万里子（2010）「19世紀末・20世紀初頭におけるハンブルクの新教育」, 『鳴門教育大学紀要』第25巻所収。

小林万里子／アンドレアス・ペーンケ／木内陽一（2011）「理想化と歴史化の狭間にある新教育」, 『福岡教育大学紀要』第60号第4分冊所収。

Krull, W. (1982). Politische Prosa des Expressionismus. Rekonstruktion und Kritik. Frankfurt am Main.

Krull, W. (2013) (Hrsg.). Krieg von allen Seiten. Prosa aus der Zeit des Ersten Weltkrieges. Göttingen.

Lamszus, W. (1912a). Ein Prolog zu meinem

- “Menschenschlachthaus”, ein Präludium zum kommenden Krieg. In: Die Friedens-Warte, Jg. 14 (Dezemberausgabe), S. 454-455.
- Lamszus, W. (1912b). Wer ist ein Patriot? Ein offener Brief an einen Menschenfreund. In: Pädagogische Reform, Jg. 36 (Nr. 42), S. 537-539.
- Lamszus, W. (1913). Vom Anarchismus zum Gesetz! Die Diagnose eines europäischen Krieges. In: Die Friedens-Warte, Jg. 15 (Februarausgabe), S. 58-62.
- Lamszus, W. (1912/2014). Das Menschenschlachthaus. Visionen vom Krieg. Erster und Zweiter Teil. – Neu herausgegeben und eingeleitet von Andreas Pehnke [= Schriftenreihe Geschichte & Frieden, Bd. 23]. Bremen.
- Lamszus, W. (1924). Der Weg der Hamburger Gemeinschaftsschulen. In: Karsen, F. (Hg.), Die neuen Schulen in Deutschland, (S. 24-85). Langensalza.
- Lamszus, W. (1926). Englische Schulversuche. Was können sie der deutschen Schulentwicklung lehren? In: Hamburger Lehrerzeitung, Jg. 5, S. 689-694 sowie in LebensGemeinschaftsSchule, (Nr. 8), S. 113-125.
- Lamszus, W. (1962). Antikrieg. In: Neue Deutsche Literatur, Jg. 10 (Nr. 10), S. 157-160.
- 松村尚子／木内陽一／アンドレアス・ペーンケ (2003) 「20世紀前半ドイツ改革教育家の反戦文学」, 『美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要』 Vol.48所収。
- Mayer, C. (2014). Circulation and internationalisation of pedagogical concepts and practices in the discourse of education: The Hamburg school reform experiment (1919-1933). In: Paedagogica Historica, Vol. 50 (No. 5), S. 580-598.
- Ossietzky, C. v. (1928): Gasangriff auf Hamburg. In: Weltbühne, Jg. 24, (Nr. 22 vom 29. Mai), S. 813-815.
- アンドレアス・ペーンケ (木下百合子訳) (1991) 「平和と国際友好と教育学的進歩のために闘った一人のドイツ人教育者——ヴィルヘルム・ラムスツス (1881-1965)」, 学習活動研究会『教授研究』第12巻第2号所収。
- Pehnke, A. (2003). Wilhelm Lamszus und die Antikriegsliteratur. In: Neue Deutsche Literatur, Jg. 51 (Nr. 5), S. 154-157.
- Pehnke, A. (2006). Der Hamburger Schulreformer Wilhelm Lamszus (1881-1965) und seine Antikriegsschrift “Giftgas über uns”. Erstveröffentlichung des verschollen geglaubten Manuskripts von 1932. Beucha (bei Leipzig).
- Pehnke, A. (Hg.) (2014). Wilhelm Lamszus: “Begrabt die lächerliche Zwietracht unter euch!” Erinnerungen eines Schulreformers und Antikriegsschriftstellers (1881-1965). Markkleeberg (bei Leipzig).
- Richet, C. (1909/2012). Die Vergangenheit des Krieges und die Zukunft des Friedens. Übersetzung von B. v. Suttner. Nachdruck, Paderborn.
- Riesenberger, D. (1985). Geschichte der Friedensbewegung in Deutschland von den Anfängen bis 1933. Göttingen.
- Riesenberger, D. (2008). Der Kampf gegen den Gaskrieg. In: Riesenberger, D.: Den Krieg überwinden. Geschichtsschreibung im Dienste des Friedens und der Aufklärung, (S. 217-237). Bremen.
- Schneider, T.F. (2003). Pazifistische Kriegsutopien in der deutschen Literatur vor und nach dem Ersten Weltkrieg. In: H. Esselborn (Hg.), Utopie, Antiutopie und Science Fiction in deutschsprachigen Romanen des 20. Jahrhunderts, (S. 12-28). Würzburg.
- 
- 1 アドルフ・イェンゼンは1896年から1899年にエッケンフェルデのボルディ教員養成所で学んだ後、1905年にハンブルクに移り、1907年に社会民主党に入党した。改革教育的アンガージュマンを理由として1914年までの間にハンブルク学校当局から14回にわたり懲戒処分を受け、最終的には停職となった。1920年に復職して、1924年以降は生活共同体学校の一つであるベルリン・ノイケルンの実験学校（リユトリ校）の校長を務めた。1929年からはブラウンシュヴァイク工科大学の教育方法学・教授学の助教授として指導にあたったが、1932年にナチスにより公務から追放された。戦後、イェンゼンは1947年から1951年にかけてニーダーザクセン州議会の最初期の議員を務めた。
- 2 とくに『我々の教育作文』は改革教育学の古典になるべき著作として国内外で称賛された。例えば以下を参照。Nord und Süd – Eine deutsche Monatsschrift, 36 (1912), S. 341-344. The School Review, 20 (1912), S. 117-120.

- 3 木内／ペーンケ／小林 2010, 6頁 ならびに Mayer 2014を参照。
- 4 Pehnke 2014, S.64-65を参照。
- 5 Schneider 2003, S. 17/18を参照。
- 6 Richet 1909/2012, S. 11.
- 7 Lamszus 1913, S.59.
- 8 Lamszus 1912/2014, S. 88/89を参照。
- 9 ヘラクレイトスの「戦いは万物の父であり、万物の王である」から着想を得たプロパガンダである。Karuscheit, Wegner & Wernecke 2014を参照。
- 10 Böhm 2002を参照。
- 11 ラムスツスは副業として著述活動を始めていた。彼の最初の著作は『トマス・ミュンツァーのドラマ』(1909年, ベルリン)であり, これに『グードルーン——ドイツの英雄伝説。古い英雄詩の再現』(1911年, ハンブルク)が続く。
- 12 この箇所は最初のドイツ語版 Lamszus (1912/2014), S. 37から引用した。というのも, この引用部分で, 彼の主張の大半が語られているからである。なお, 以下の『人間屠殺場』からの引用にはページ数のみを記している。
- 13 Krull 2013を参照。
- 14 1928年までにドイツ語版は72版を重ねた。——1914年のデンマーク語訳のまえがきには『人間屠殺場』がポーランド語, ラトヴィア語, エスペラントで読めると記されているが, 文献目録上はこれまで確認されていない。シュナイダーが言及したスウェーデン語版(1914年)も同様である (Schneider 2003, S. 67)。
- 15 Hamburger Echo, Jg. 26 (Nr. 204 vom 1. September bis Nr. 211 vom 10. September 1912)を参照。
- 16 Fried 1912, S. 281/282f.
- 17 Fried 1915/2005, S.94.
- 18 アルフレート・ファウストは反戦運動家として1917年にドイツ独立社会民主党に入党した。1919年には, 彼が前年に共同発刊した『ブレーメン労働者新聞』の編集長として, ドイツ独立社会民主党のスポークスマンとなり, 1922年に『ブレーメン民衆新聞』の編集長代理となった。1932年にはナチスに拘禁され, 強制収容所を転々とした。戦後, 1950年にファウストはブレーメン市政府の広報室長となった (Staatsarchiv Bremen, Nachlass Alfred Faust: 7, 94 – 10を参照)。
- 19 1912年9月24日から28日までジュネーブで開催された第19回国際平和会議においては, ヨーロッパ諸国で広まりつつある狂信的な愛国主義に対抗する決議が可決されるとともに, 伊土戦争への抗議がなされた。メッセージを受け取ったラムスツスは『平和の番人』1912年10月号 (S.391)にコメントを寄せるとともに, イギリス版, アメリカ版にもまえがきの補足として言及した。ここに『人間屠殺場』が日本語にも翻訳されると記されている。
- 20 Gleim & Richter 1980, S. 131-152を参照。
- 21 「公安を害する青年教育者」と題する寄稿は1912年10月2日付『ハンブルク通信』に掲載された。ここでは1912年10月9日付の『教育改革』Jg. 36 (Nr. 41) から引用した。
- 22 Kempendorff 1913, S. 60/61.
- 23 Christadler 1994を参照。
- 24 Lamszus 1962, S. 159.
- 25 Riesenberger 1985を参照。
- 26 Pehnke 2014, S. 123/124を参照。
- 27 同上書, S.124.
- 28 Staatsarchiv der Freien und Hansestadt Hamburg, Bestandsnummer 361 – 3, Schulwesen – Personalakten, A 14 32, PA Wilhelm Lamszus: Fragebogen “Military Government of Germany” vom 19. Juli 1945を参照。
- 29 Lamszus 1926を参照。
- 30 Riesenberger 2008を参照。
- 31 2005年の改築工事の際, 初めてこの隠し場所の存在が偶然に発見されて, 『毒ガス』の出版につながった (Pehnke 2006)。
- 32 Lamszus 1924, S.84.
- 33 ジャーナリストであり編集者であったジーカーは, 『ハンブルク新聞』の文芸欄で「抵抗精神を持った文化活動」を展開した。行間にメッセージを入れ込んだり, エルンスト・バルラハ (1870-1938)らを擁護したり, ハリー・ロイス・レーヴェンシュタインなどのユダヤ人作家の著作を初めは実名で, 後にはペンネームで掲載したりした。
- 34 この論評の再版 (Pehnke 2014, S.213-219)を参照。
- 35 Pehnke 2003を参照。
- 36 Dudek 1993を参照。
- 37 Lamszus 1962, S.160.
- 38 Lamszus 1964/2014, S.220-226.
- 39 近年のドイツ新教育運動研究の動向については, 小林／ペーンケ／木内 2011, 15-16頁を参照。